

設計図は残さず心つなく 高校生が半年かけて作った巨大竜を燃やす夜

清水大輔 2023年7月1日 8時00分



建立させた竜の前で記念撮影をする須坂高の生徒たち=2023年6月29日、長野県須坂市、清水大輔撮影



[PR]

生徒が半年以上かけて巨大な竜のオブジェを制作し、文化祭に向けてグラウンドに建立する。後夜祭でそれを解体し、燃やす。長野県立須坂高校（須坂市）で半世紀近く、先輩から後輩へと脈々と受け継がれる伝統行事だ。新型コロナの影響で過去3年間は様々な制約を受けたが、今夏は材料やデザインを新たにした竜が立ち上がった。

近くに臥竜山という山があり、校章がリンドウ（竜胆）の一つ「ミヤマリンドウ」であることなどから、同校では竜をシンボルとした「りんどう祭」（文化祭）で生徒がオブジェを作る。1967年に竜の首から上を作ったのが始まりで、約10年後から胴体や腕を付けるようになった。

半世紀前、物理教師は言った

分厚い木材を骨格とし、年によって高さ10メートルを超える。しかし、設計図の引き継ぎはないという。50年前、最初に中心となって骨格を設計した、建築士の資格を持つ物理教師の言葉が今も語り継がれているという。

「設計図は（残さず）燃やせ」。

今年の竜制作でリーダー役を務める徳竹創来（そら）さん（3年）は「そこが面白いところであり、いいところ。つなげていくのは（設計図という）紙ではなく、気持ちなんです」。

どうやって作るのか。制作は頭、首、胴、尾などパートごとに分かれる。骨格の上を小麦粉で作ったのりを使い、新聞紙を何重にも貼り合わせる。徳竹さんによると同校には「竜を作るために入学する」生徒が少なくない。1年時から制作に関わり、先輩から後輩へと現場で作り方が「伝授」される。

卒業生で徳竹さんと同じリーダー役を2000年度に務めた市内の宮沢智史さん（41）は「深夜作業は禁止だと先生に言われても、間に合わないから夜通し、みんなでおしゃべりしながら作業する。それが楽しいんです」と振り返る。木材の上などに将来の夢や好きな人の名前を書く生徒もいた。

完成までの過程そのものが地域の人たちにとっての風物詩で、テレビのドキュメンタリーで取り上げられることもあった。

今年は高さ8メートル、長さ40メートル

しかし、コロナ禍で事情は変わった。2020年は制作自体ができなかった。ただ、生徒が各自の願いを書き込んだ竜のウロコをロープにはって掲げたり、3年生の卒業前に下級生が映像作品で竜を再現したりする取り組みをした。21年は骨組みに竹を採用。環境への負荷や資金面の負担を抑え、制作期間や労力を減らすコロナ対応の意味があった。

21年は地面からはい上がるような、22年は羽を付けて飛び立つようなデザインだったのもコロナ下の意思表示だった。

今年の竜は高さ約8メートル、長さ約40メートルで雲の上を飛ぶデザイン。ひれの部分はLED電球で光るという。「今までと違う生活を強いられる中でも、新しい世界を見ていく姿にしよう、とみんな考えた」と徳竹さん。

竜は6月29日に建立された。文化祭の一般公開は過去3年は制限があったが、今年はほぼ通常通りに実施される。

7月1日は午前10時から、2日は正午から。（清水大輔）